

マタイによる福音書5章7節 「憐れみ深い者」

1A 義に飢え渴く者の憐れみ

1B 賜物としての義

2B 弱き者への同情

2A 「憐れみ」とは？

1B 「無関与」ではない

2B 惨めさに対する憐れみ

3B 具体的な行動

3A 「憐れみを受ける」約束

1B 自分の憐れみに伴う神の憐れみ

2B 行動ではなく状態(交わり)

本文

山上の垂訓シリーズ、今日は、「憐れみ深い者」について見て行きます。マタイ5章7節。「**あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるからです。**」を見て行きます。

1A 義に飢え渴く者の憐れみ

イエス様が山上の垂訓を語られた時、それをむやみに思いつつままに語られたのではないことを、何度かお話しています。順番があつてこそその、一つ一つの言葉です。私たちは、一つ一つじっくり見て行っているので、一節ずつ読んでいますが、本当は、イエス様は、この説教をもちろん話し言葉で、5章から7章までを、一時間足らずで弟子たちと群衆にお語りになったことでしょう。そして、ルカによる福音書にも類似の説教がありますが、イエス様は、一度にこれらのことをお語りになり、いろいろなところで、少しずつバージョンを変えてお語りになっていたような気がします。ですから、その臨場感を忘れてはいけません。

1B 賜物としての義

ですから、イエス様が「**心の貧しい者は幸いです**」というところからお語りになったことを忘れないでください。天の御国の実体であられるイエス様に出会い、そこで自分に対する全き絶望感が襲って来るところから始まります。それが天の御国の入口であり、そして自分自身に対する、その罪深き自分に対する悲しみが襲います。「**悲しむ者は幸いです。その人たちは慰めを受けるからです。**」とあります。それから、へりくだり、柔和さが生まれます。「**柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです。**」自分が何様であるかを知っているので、相手に何かをされたとしても、それに対して卑屈になったり、やり返したりしないということです。そういった人がかえって、地を受け継ぐ、つまり多くのものが任されていくようになります。

それから、「義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。」と続きます。初めの三つの幸いによって、自分自身には全く義がないことを悟っています。ですから、ここで言っている義とは、神からの賜物としての義です。信仰による義です。これに飢え渴いている、つまり、神の義を第一に求めている姿です。その人は必ず満ち足ります。つまり、御霊によって満たされて、神の似姿に変えられていくこと。そして主が戻って来られる時に、栄光の姿に変えられることです。

2B 弱き者への同情

そこで初めて、「**あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるからです。**」と続きます。しばしば世の中では、義を追い求めていくことが悪いことのように語られます。一つは和を見出すからと思われまふ。これまでの秩序を壊してしまうのではないか、というものです。穏便に済ませようとするのです。もう一つは、正義というから互いの正義があつて、それで争いが起こるのだというものです。宗教戦争がそうで、自分たちのそれぞれの正義がぶつかっているからだ、と言います。ですから、そういった判断を下さないということが正しく、何もしないことが憐れみであるとさえ思われています。

けれども、イエス様が義に飢え渴いている者は幸いだと言われたその次に、「**あわれみ深い者は幸いです。**」というのは、そのまま筋が通っているのです。義に飢え渴くというのは、自分自身に義がないことを告白していることの裏返しです。ですから、悪を行っている人々を見ても、そこで自分もその状況に置かれたら、同じように悪を行っているかもしれないと思えます。同情できます。イエス様は、罪は犯されませんでした、弱さを身にまとわれたので、同情する方でした。「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。(ヘブル 4:15)」そして、悪を行っている者に対しても、「何をしているのか分からないからだ」という同情が生まれます。イエス様がまさに祈られた、「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。(ルカ 23:34)」ということでもあります。

2A 「憐れみ」とは？

1B 「無関与」ではない

憐れみのギリシア語は、ἐλεῆμων(エレエモン)と言いますが、「他の人のところに入って、自分の目を見て、聞いて、感じて、考える」というような意味合いがあります。だから、ただ感じるだけでなく、具体的に行動に移すという意味合いがあります。ですから、先ほど話したように、「判断をしないこと」「何も関わらないこと」とは大いに違うのです。そのような無関与ではなく、具体的に体を動かして、その可哀な気持ちを表すのです。それで聖書には、最もよく分かる例が、良きサマリヤ人です。彼は半殺しになっていた道端で倒れている人を、手当てをし、ろばに乗せ、宿にまで連れて行き、その宿代まで支払うという行動にまで移しました。いわゆる「慈善活動」という言葉がありますね、そこにまで関わるといふことを意味します。

2B 惨めさに対する憐れみ

憐れみがどういう意味か分かり易くするのは、恵みと比べてみるとよいと思います。恵みというのは、罪に関わることです。罪の中にいる人をそこから救い出しますが、罪を犯したにも関わらず、それでも罪を赦し、そして義人に対する報いと同じような報いを与えられるというのが恵みです。キリストの義を代わりに頂いて、それでキリストが神から報われるように、キリストにある自分が報われるということです。神の子にさせられること、神の相続人になり、御国を相続することです。

では、憐れみがどういうものか？と言いますと、「惨めな状態をそこから和らげる」と、言ったらよいでしょうか？その惨めな状態がその人の罪の結果の時もありますし、また、アダムが罪を犯したため世界に入り込んできたもの、例えば天災であるとか、病であるとか、そういったものであるかもしれないし、そういった苦しみから救い出すことです。

例えば、エペソ 2 章を観てみますと、こう書いてあります。「1 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、2 かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。3 私たちもみな、不従順の子らの中にあつて、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、5 背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」罪の中に死んでおり、神の御怒りを受けるしかない状態を、神は豊かに憐れんでくださって、そこから救い出してくださいました。そして、救われたのは神の恵みとありますが、そういった価値なきものなのに神が愛してやまず、ご自分のところまで引き上げてくださったことを意味しています。

3B 具体的な行動

イエス様が、福音書において、かわいそうに思われたという言葉が数多くでできますね。かわいそうに思われて、悪霊を追い出し、病を直し、御国の福音を宣べ伝えられました。そして、五千人、四千人に給食をされました。とても具体的に行動に移されたのです。そして何よりも、神がキリストを人として遣わしてくださったこと自体が憐れみの行為です。罪の世界の中で悶え苦しんでいるところまで、神が人となって現れてくださったのですから。しかも、それだけではありません。十字架の死に至るまで私たちに憐れんでくださったのです。そういった罪の中に縛られていて、死んで滅ぶしかなかった人々のために、ご自身が死んで呪われた者となりました。

聖書には、神の憐れみに基づいて憐れみを示すことが教えられています。「詩 18:25 あなたは恵み深い者には恵み深く全き者には全き方。」英語では、慈しみ深いと訳されています。ここで、いつくしむ者に慈しみを施すという、憐れみを示すことが命じられています。「イザヤ 58:6-8 わたしの好む断食とはこれではないか。悪の束縛を解き、くびきの縄目をほどこき、虐げられた者たちを

自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。飢えた者にあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見てこれに着せ、あなたの肉親を顧みることではないか。そのとき、あなたの光が暁のように輝き出て、あなたの回復は速やかに起こる。あなたの義はあなたの前を進み、【主】の栄光があなたのしんがりとなる。」いけにえよりも、憐れみを好むという言葉も他にありません。

3A 「憐れみを受ける」約束

1B 自分の憐れみに伴う神の憐れみ

そして、「**その人たちはあわれみを受けるから**」という約束があります。自分が憐れむ者であるならば、神の憐れみを受けるということですが、これは一体どういうことでしょうか？ イエス様が主の祈りの中も、このように祈れと命じられました。「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。(マタイ 6:14)」とあります。そしてもう一つ、一万タラントの借金をしたしもべの話があります。主人が帳消しにしましたが、本人は百デナリの借金をした者を赦さなかったで、主人は彼を獄吏に引き渡しました。それでイエス様は、「あなたがたもそれぞれ自分の兄弟を心から赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに、このようになさるのです。(18:35)」とのことです。

2B 行動ではなく状態(交わり)

すると、まるで神から憐れみを受けることが、条件付きであり、自分が憐れみを示すから憐れみを受けるというものに聞こえてしまいます。、自分が人の罪を赦すことによって、神から罪が赦されるという、条件付きの救い、行いによる救いのように聞こえます。

ここでまずわきまえないといけないのは、「幸いだ」と宣言しているのは、「何かを行う、行動ブック」みたいな行為のことを話しておられるのではありません。姿勢と言ったらよいでしょう。そうなっている者は幸いです、という意味合いです。ですから、ここで憐れみを示したら、得点で神から憐れみを受けるということではなく、「憐れみを示している者には、神の憐れみが注がれている」というような意味合いになっています。つまり、「神の憐れみを受けている者は、憐れまないではおられない」という人なのです。逆に、人を憐れんでいない人は、本当には神の憐れみを受けていないということです。ここはとても大事です。多くの人が、こう言った箇所を読むと、自分の能力不足だと感じるのです。いいえ、そうではなく、神の恵みと憐れみを心から受け入れていないという問題のほうが深刻なのです。本当に憐れみを受けているのであれば、自分が兄弟を憎んだままでいることは、本当に困難になります。その憎しみを捨てないと、神の憐れみを喜び、楽しむことができなくなります。ですから、私はいつも話すのですが、これは「行動の条件」ではなく、「交わり」なのです。慈しみ深い神と交わるなら、人を慈しむという行ないの中で交わりを保つことができます。聖なる神と交わるなら、次の説ですね、心が清くなっていなければ、聖なる神を知ることも、見ることもできないということです。